英語　大阪大学　外国語学部以外（前期）　1／2

＜全体分析＞

試験時間　90 分（文学部 105 分）

解答形式
記述式（一部マーク式）

分量・難易（前年比較）
分量（減少・やや減少・[変化なし]・やや増加・増加）
難易（易化・[やや易化]・変化なし・やや難化・難化）

出題の特徴や昨年との変更点
従来通りの出題形式である。試験時間から考えると，記述量は非常に多い。

その他トピックス
自由英作文の指定語数はどうやら「80 語程度」で定着しそうである。

＜大問分析＞

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
Ⅰ(A)	英文解釈 (89 words)	人間のエネルギー源	当大学の設問としては「平易」である。ポイントとなるのは a tenth / the rest / no longer / now that の意味を正確に訳文に反映させることだろうが、いずれも英語学習の基本段階で習得すべきアイテムである。下線部第２文の訳文構成としては、まず主節の訳文を示した後に although 節の訳文を示す方が断然スムーズである。	易
Ⅰ(B)	英文解釈 (91 words)	創造性への評価 ── 時代によって変わることと変わらないこと	下線部第１文の and 以下は、意味は把握できてもそれを的確な日本語に落とし込むのに苦労する。直訳ではかなり読みづらい日本文になってしまうことだろう。この「的確な日本語訳が困難」という事態はここ数年の大問Ⅰでは常態化している印象がある。	標準
Ⅱ	読解総合 (733words)	色は特定の感情を呼び起こすか	全体として，難語も少なく読みやすい英文であった。設問(1)では従来通り，語句レベルのパラフレーズ問題が出題された。知識のみで解けるものも多く，それ以外の選択肢も文脈からその意味を十分類推可能である。設問(2)，(3)は，下線部の表現が指すものを英語で抜き出す問題。いずれも直前の文中に正解があり，きわめて平易な設問と言える。設問(4)，(5)は記述問題であるが，いずれも書くべき箇所は明白で，該当部分の文構造も単純である。些細なミスが命取りになる。設問(6)は内容一致問題で，選択肢は日本語で与えられている。設問(7)は本文全体の趣旨を表すものとして適切な英文を選択する問題。全体的に論旨展開が把握しやすく，いずれの設問においても迷う要素は見当たらない。	やや易
Ⅲ	自由英作文	効率化・高速化の追求の是非	昨年に引き続き 80 語程度という語数指定。「具体的に利点もしくは問題点を１つ挙げて」という条件を守ると是か非かの立場を表明することになるため、結果的に「二者択一型」の設問ということになる。効率化の追求を是とする立場を取れば解答は比較的容易に展開できるが、非とする立場を取ると「場合によっては非」という論にならざるを得ず、強い説得力を持たせるのに苦労するだろう。効率化を全面的に否定することは常識的に考えて不可能であろうから。	標準

© 河合塾　2023 年

Ⅳ(A)	英作文	いかにすれば人間は分かり合えるか	日本文の主旨自体は難解ではないが「共通性」「違いを認める心の余裕を生む」「目を奪われる」などは読み換えが必要。また「だから」の修飾箇所を特定するのは困難で，論理的に矛盾のない英文を書くのはかなり苦労を強いられるだろう。	標準
Ⅳ(B)(イ)	英作文	海外文学の楽しみ	ここ数年で最も難度が高かったのではないか。全体に柔らかくこなれた日本文で、その奥に潜む具体的な意味をほじくり出してやらないと非常に漠然とした意味しか伝わらない英文になってしまう。第１段落の「自分と似ている部分」・「知っているから面白い」が山場と言えよう。第２段落第１文は基本的な比例構文などを用いれば手堅く表現できるだろう。第２文の「解像度」は直訳である resolution / definition を知らなくとも的確に読み換えて対処することが可能。日頃の鍛錬が試される部分だった。	やや難
Ⅳ(B)(ロ)	英作文	文化的・歴史的作用としての五感	一見日本文全体は分かりやすい印象を受けるが「個々人の主観的・身体的作用」「文化的・歴史的なものである」を適切に読み換えて表現するのは容易ではない。また第２文の「何をどう感じ取るか」や「…によって異なるのだ」は安易に直訳すると不自然な英文になるため，文全体を適切に読み換えた上で適切な構文を用いて表現する必要がある。	標準

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」
難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で，当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

どの設問にも，英語であれ日本語であれ，文章が伝えようとしているメッセージを正確に探り出す能力を試そうとする姿勢が貫かれている。同時にまた，正しい英語学習の過程で身につくであろう知的教養の有無も試していると考えられる。これらの要求に応えるには，学習した素材を何度も復習し，自分自身の中にある英語理解を「深い」ものにしていく必要がある。「手っ取り早く設問に答える方法」を追いかけているようでは，求められている資質は獲得できない。むしろ，「時間のかかる」学習こそが，大阪大学合格への一番の近道であることを実感してもらいたい。

© 河合塾　2023 年